査読付論文（*Refereed Article*）

遺稿“*Die Tatsache des Wollens*”（意志の事実）におけるテンニェスの社会学の基礎概念の解明 ― 記憶をめぐる本質意志論と選択意志論との比較

Studies of the fundamental structure in Ferdinand Tönnies' Sociology from Posthumous manuscripts *"Die Tatsache des Wollens"*: the comparison of theory of Natural Will to Rational Will from the viewpoint of Memory

西 澤 真 則

Masanori Nishizawa

Based on the Tönnies' posthumous manuscripts "*Die Tatsache des Wollens*" (The fact of Will, 1899) and "*Community and Society*"(1881/1887), this study focuses on the comparison between "Natural Will" and "Rational Will" in terms of theory of "Memory". In "*Die Tatsache des Wollens*", Tönnies remarks that "Memory" conditions the past experiences through custom. It means that "Memory" is considered as the form of "Natural Will". In the tradition of Tönnies' studies, however, "Memory" has been so far understood as a kind of storage, that guides or helps "Rational Will" drive. Therefore it has been concluded so far that "Memory" is a kind of a driving power and its storage in relation to, or in terms of "Will", so that "Memory" has been evaluated in a sphere of "Rational Will", the component of the cause of aciton. "Memory" is a kind of a driving power and its storage in relation to without any fundamental distinction of "Natural Will" or "Rational Will".

The Careful refering to "Reality" in his terminolgy, however, shows that "Memory" represents "Reality" itself, that could bring as ideal an separated to the common sense, and so that it lets a human beings as a mortal in an intergenerational joint feel, find, and live. From Tö nnies' viewpoint of "Memory" as "Reality" could we find a reference point, which serves the idea of mediation among discords happening as a culturally or historically. Thus in the same context, Tönnies' theory could also serve the alternative idea for publicness.

キーワード：本質意志（有機的意志）、選択意志（合理的意志）、了解、記憶、記号、因果性

Key Words : Wesenwille (Organisches Wollen/ Natural Will), Kürwille (Rationales Wollen/ Rational Will), Verständnis (Understanding), Gedächtnis (Memory), Zeichen (Symbol), Kausalität (Causality)

序論[1]

本稿では、1899年に遺稿として残されたテンニェスの“*Die Tatsache des Wollens*”（意志の事実）における意志論の構想をもとに、ゲゼルシャフトの制約としてのゲマインシャフトの整合的な基礎づけを目指す。ここで整合的な基礎づけとは、意志論に内在的にゲマインシャフトとゲゼルシャフトとの関係を示すということである。テンニェスの遺稿『意志の事実』は、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（第一版1881年、第二版1887年）における意志論の基本構想を継承するものであり、そこに大きな変更は認められない。

しかし、遺稿において、さらに徹底されているのは、「認識における心的状態」が「意志の事実」により支えられているという構図である（T.d.W. §51）。意志の事実とは、「意志されていない（…）最初の事実があり、（…）〔第二に〕記憶されているものがあ〔り〕（…）そうして認識され、記憶された事実にとっての意志が、第三の事実として、意志の遂行をなす」（T.d.W. §53）、そうした意志の流れの全体のことを指す。そして、「認識における心的状態」とは、主観と客観との相互関係（T.d.W. §8, §14）としての「表象のうちに」自己と他者との相互関係があることを指す。さらに「認識における心的状態」が「意志の事実」に支えられているとは、自己と他者との共同関係が、本質意志に基礎づけられているということである[2]。本質意志は、「思惟を含む意志」とされる。この命題には、表象関係の認識に関与する意志のはたらきが表現されている。そうであるならば、「意志の事実」には、表象の相互関係の織りなす世界が、意志の自発性を通して、いまここに立ち現れる作用が認められる。そうした自発性が、個別的な衝動としてあらわれ、他者を巻き込み、やがて他者に巻き込まれる語りの渦へと高まってゆく様は、本質意志の三つの形式――適意、習慣、そして記憶――のなかに説明されている。この「自発的なものとして理解」[3]されるべき有機的生命、すなわち本質意志こそ、個別性を全体へとつなぎあわせることで形成される人と人との相互関係である。その流れが習慣や儀礼のなかに痕跡を残す了解の構造にほかならない[4]。そしてその了解の構造の一つの表現形式が、表象の相互関係と意志の事実との交錯点に現れる、表象としての記憶であり、また意志としての記憶である。

少なくとも日本の人文科学の領域では、テンニェスよりも、社会学者デュルケームは、その名を馳せている。彼は、初期理論社会学の成果の一つの到達点を「社会的事実」の概念をもって示した。「社会的事実」とは、個別性と全体性との間にある相互的流れそのものである。それは「集合表象という（…）諸個人の意識が結合しなかったならば生まれてこないような精神的状態」すなわち「個人の本性から由来する精神的状態の上にさらに付加された精神的状態の巨大な総体」[5]とされる。これはテンニェスにより「多における一、または一における多」[6]とされる実在的有機的生命そのもの

1　テンニェスの原典からの引用は、Ferdinand Tönnies: *Die Tatsache des Wollens*. Hrsg. Jürgen Zander: Berlin: Duncker u. Humblot, 1982.および Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979. による。原典を引用参照する際、“*Die Tatsache des Wollens*”＝T.d.W.、“*Gemeinschaft und Gesellschaft*”＝G.u.G.と略記する。“*Die Tatsache des Wollens*”は、本論中では、遺稿＝『意志の事実』とし、拙訳を用いた。なお邦訳からの引用は、テンニエス 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：純粋社会学の基本概念（上）、（下）』 杉之原寿一訳、東京、岩波書店、1979年による。邦訳を引用参照する際は、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）、（下）』と略記する。引用文中の（…）は中略を、〔　〕は筆者による補足を表す。

2　Ferdinand Tönnies: *Soziologie im System der Wissenschaften*: *Soziologische Studien und Kritiken*. Zweite Sammlung, Jena: Verlag Gustav Fischer, 1926, S. 241.

3　「有機体の生成が自発的なものとして理解されなければならないのと同様に、本質意志の生成も自発的なものである。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』p. 168（G.u.G. S.75）.

4　『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』pp. 183f（G.u.G. S.201）.

5　デュルケーム 『自殺論』 宮島喬訳、東京、中央公論社＜中公文庫＞、1985年、p. 392f.

6　『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』p. 34（G.u.G. S.3）.

のことである。このテーゼは、19世紀後半に覚醒した社会学、心理学の問題意識に共通して宿っている。その問題意識のなかで、いまここにある個人を捉える端緒は、先行する共同性の文化的宗教的営みのなかで生成し、各人のなきあとの痕跡も人と人との相互関係のなかで表現されると考えられる。こうした相互関係のなかに人間の諸関係を見出す思想は、例えば、アルヴァックスの集合的記憶論、初期フロイトの精神分析学的方法ならびに無意識の発見、ユングの集合的無意識、ウェーバーの存在と当為の区分、ないし価値文化論、ブーバーの対話関係であり、やがてはハイデガーの世界内存在、和辻の空間的志向性に基づく文化論、アレントのリアリティ論、それらの応用形態として押し出されてくるポストモダンの緒論、なかでもレヴィナスの他性と同一性との緊張関係へとつながっている。

相手の存在を自己との相互関係の中に、すなわち「潜在的エネルギー」(T.d.W. §53)のなかに見ようとする思想は、テンニェスの主著のなかで、「認識における心的状態」と「意志の事実」の二つの事実の間に関与する、知性の質的相違に対応する意志のあり方を振り分ける参照点となっている。この相互関係への接近方法には、同時代の他の思想家と一線を画すテンニェスの独自性が示されている。ここでテンニェスの意志論には、ドイツ観念論的意志理解を引きずる「因果性としての意志」とは異なる相が示されていることが見て取れる。ドイツ観念論のなかで意志の基礎定義の出発点を与えたカントによれば、意志は、表象に対応する対象を生みだすように「自分自身を規定する能力」[7]とされる。これこそテンニェスにより説かれた選択意志であり、すなわち選択意志と表象との関係として、本質意志に従属する形態であることを指しているのだ。ここで「選択意志」は表象との関係からみれば「機械的形成物」[8]である。また「意志」との関係からみれば、概念(観念)による構築である。すなわち、選択意志論の内実は、概念的知性に駆動された主体が、他者の多様な差異性を目的実現のための表象へと抽象するエゴイズムへの反省のもとに展開されているのだ。

選択意志論を支柱とするカント倫理学とその系列は、「汝の格率が普遍的な法則であるかのように行為せよ」[9]と、神的存在への拠り所を失いつつあった近代市民社会にて要請される普遍的規範を示しながらも、そうした道徳性の原理は、知により選択された見取り図に向かって力を発揮する行動様式と重なるところに確立されている。その行動様式のなかで、他者がもつ「一切の性質の差異」は、「純粋に量の差異」に置換されることになる[10]。それは、分かち合うことのなかに成り立つ、寡黙で傷つきやすさを湛えた互いの相互理解や約束(T.d.W. §50)[11]、親密性、地域性、伝統文化を否定し、また捨象し、十把一絡げの同一性を支配的に相手に押しつける暴力である。テンニェスによれば、そうした主観による客観の操作を駆動するのは、選択意志とされる。彼は殊に効率性と迅速さをもって自己利益を追い求める目的合理的な功利的気質のなかに、他者を単なる物件とみなすエゴイズムの現代的傾向を指摘している[12]。これが選択意志の思考行動様式である。そう考えれば、上から目線の支配的同一性を振りかざす抑圧的思

7 カント 『実践理性批判』 波多野精一、宮本和吉、篠田英雄訳、東京、岩波書店<岩波文庫>、1998年、p. 41.

8 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 34 (G.u.G. S.3).

9 カント 『道徳形而上学原論』 篠田英雄訳、東京、岩波書店<岩波文庫>、1998年、p. 85.

10 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 200 (G.u.G. S.92).

11 Als ein stillschweigend Versprochenes gilt alles, was als selbstverständlich in den gengenseitigen Beziehungen der Menschen vorausgesetzt und erwartet wird. S. 103, Tönnies: *Die Tatsache des Wollens*.ならびに、主著の以下の箇所を参照した。「了解はその本質上暗黙のものである。なぜなら、了解の内容は、言葉では尽くしえないものであり、無限なものであり、概念的把握を許さないものであるから。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 62f (G.u.G. S.19).

12 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(下)』p. 79 (G.u.G. S.141).

想の持ち主であり、ナチズムの血と大地の思想の代弁者とみなされてきたテンニェス像は、もはや甚だしい歪曲にすぎないことは言うまでもないことであろう[13]。むしろ、テンニェスは、ドイツ観念論的な固体の思想の呪縛を解き、「精神的状態の巨大な総体」という表象の世界を支えつつ、またその全体としての複雑な世界に協働する意志のもとに繋ぎ止められうる人間の共生の可能性を模索する思想の系譜のなかに立っているのだ。

その可能性の模索こそ、まさしく本質意志論の内実をなす。テンニェスの社会哲学では、意志が時間性の根源とみなされる。それゆえ、自己と他者との相互的関係は、現在の相において一度たりとも複製されることのない瞬間瞬間の出来事の連続が過去の相に呑み込まれ、過去の相において現れるものとして、そこから取り出されてくるものと考えられる[14]。このことは、「過去的なるもの」の相に含み込まれる有機的実在性ならびに了解の構造のことである。また「過去的なるものから説明され」るという意味では、記憶のことである。それは、死していまはなくとも、過去の世代から現在へと連続的に汲み与えられている歴史文化的共生の出来事をたぐり寄せる方法(本質意志論)であり、将来における人と人との関わり合いの問題を、いまここに立つ現在の人間の知的態度が引き起こす問題として診断する方法(選択意志論)である。

従って、テンニェスの選択意志論は、他者の意志を侵害して、自己の意志のみを肯定するエゴイズムの引き起こす近現代の人と人、人と自然との共生関係の意味を問い直すための有力な方法論であるといえよう。それは、他者を主観の操作対象としてみることで、他者の存在を連関無き永遠なる他者として扱うエゴイズム的生(ゲゼルシャフト)から、自己の意志も同じ一つの意志に巻き込まれた実践的存在として出来事を共に担う(ゲマインシャフト的)「同情」と「共感」への転回を希求する思想である[15]。そうしたテンニェスの「意志の事実」の内実こそ、意志と表象としての世界の接面をなす「記憶」――表象としての記憶と、意志(想起)としての記憶――であり、また寡黙な了解の言語に属する記憶への知性の態度が、意志論の構成を、本質意志と選択意志との二つの形式にわけるアウトラインとなっている。

それゆえ、従来、不明瞭なものと解されてきたテンニェスの意志論の構造は、本質意志論と選択意志論とのそれぞれの構想のなかで姿を変える記憶の位置づけを追うことで、より整合的に解釈されると筆者は考える。こうした「記憶」を間においた意志論の再解釈を通して、二つの意志は整合的に区別され、それにより意志論に基礎づけられた体制論の構成――ゲゼルシャフトの生成の制約としてのゲマインシャフト――は明確な位置関係を得るに至るだろう。否、少なくとも、テンニェスの体制論の構想に関して、「純粋」に理論的に議論するひとつの共通口が見出されうることを筆者は期する。

本稿の構成は以下の通りである。「1. 遺稿"*Die Tatsache des Wollens*"(意志の事実)の成立史」では、遺稿の成立史を辿りながら、意志論と記憶との関係に焦点を絞ることで、遺稿の全体像を概要する。「2. 本質意志論に関する二つの解釈枠」では、従来の本質意志論解釈の二つの枠組みを押さえながら、そこから記憶論への言及が欠如する原因を指摘す

13 クリスティアン・グラーフ・フォン・クロコウ 『決断:ユンガー、シュミット、ハイデガー』 高田珠樹訳、東京、柏書房<パルマケイア叢書11>、1999年、pp.132ff. ならびに、新明正道 『ゲマインシャフト』東京、恒星社厚生閣、1970年、pp. 63f.「テンニェス自身ナチズムによってゲマインシャフトの観念が政策的に利用されるのに対して危惧の念をもっていたことは事実である。しかし彼のゲマインシャフト論のなかに彼の意図のいかんにかかわらず保守的反動主義によっても利用され得る論理が含まれていたところに問題があったのである。」

14 「本質意志は過去的なるものにもとづいており、生成しつつあるものと同様、この過去的なものから説明されなければならない。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 165 (G.u.G. S.73).

15 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 59f (G.u.G. S.17).

ることになる。「3. 遺稿における記憶論：了解の構造と本質意志」では、遺稿における本質意志論と記憶論との関係について論述する。そして、「4. 選択意志と記憶」では、選択意志論の角度から記憶の位置付けを整合的に論述することを目指す。

1. 遺稿"*Die Tatsache des Wollens*"（意志の事実）の成立史

1.1 ミュンヘン大学哲学科学部長職への公募論文[16]

"*Die Tatsache des Wollens*"（意志の事実）は、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州立図書館（キール）所蔵のテンニェスの遺稿の一部であり、ザンダー（Jürgen Zander）の編集により再現されたものである。遺稿の原型は、手稿や覚え書きからなる草稿から成りたち、やがて『意志の事実』と題され、1897年のミュンヘン大学哲学科の学部長職の応募に応え、公募論文として準備されることになる。公募論文のテーマは、「意志の事実に関する詳細な心理学的分析」であり、論述には、意志の様々な可能態と変容とを体系的かつ独立的に扱うことが要求されていた。ここで同時代のテンニェスの思想の受容と評価とをみるために、公募論文の提出に先立つ、テンニェスとミュンヘン大学関係者との間に交わされた社会学の講座設立に関わるやりとりに触れてみたい。

19世紀末、新しい学問領域として確立されつつあった社会学の普及という使命を兼ねて、かねてよりテンニェスは、友人のブレンターノ（Lujo Brentano）[17]にミュンヘン大学への就職と社会学の講座設立の相談をもちかけていた。また同大国家経済学部のリール（Wilhelm Heinrich Riehl）[18]とのテーマ的親近性もあり、同大には社会学の講義を受け入れる下地が整いつつあった。テンニェスは、この機運のなかで、心理社会学の領域での哲学的ターミノロジーをより確かな体系へと高める目的も兼ね、イギリスの言語学者ウェルビー（Lady Victoria Welby）により応募された公募論文にも投稿している[19]。

こうした経緯のなかで1899年に、『意志の事実』は、哲学科学部長職への公募に提出されることになる。この審査では、公平を期すために、論文は匿名で査読され、哲学科内での党派的影響を可能な限りそぎ落とした形がとられた。ハンブルクでの港湾労働者の研究[20]との関係などから、ともするとマルクス主義者とも誤解されかねないテンニェスの経歴も、審査内容には影響を及ぼすものではなかった。しかしながら、匿名とはいえ、審査員の思想や発想が、候補者のそれに親近性があり、候補者がミュンヘン大学哲学科の周囲で輩出された人物であれば、それが誰の手になるものであるかを推測するのは容易であるだろう。また、自分たちが育成し、親しみのある人物の書いたものであるならば、既知の発想として受容されやすいという強みもあるだろう。こうした例に漏れず、この公募では、ミュンヘン大学で教授資格論文を提出していた人物が選ばれることになる。テンニェスの最初の教授資格論文は、キール大学で提出され、ミュンヘン大学での提出は初めての試みであったということも、落選の一つの原因であったのではないだろうか[21]。

16 T.d.W. S.11-37.

17 Lujo Brentano（1844-1931）は、テンニェスの遺稿が提出された1899年の時点で、ミュンヘン大学にて教鞭をとっている。主著は、ルヨ・ブレンターノ 『近世資本主義の起源』 田中善治郎訳、東京、有斐閣、1941年.

18 Wilhelm Heinrich Riehl（1823-1897）は、『ドイツ民族の自然史』などの民俗学的業績を残していて、1859年よりミュンヘン大学教授を務めている。ザンダーによれば、テンニェスの本質意志論の構想のなかでも「習慣」に関する内容が、リールの業績と響きあうところがあり、テンニェスのミュンヘン大学への着任を期待していたと想像される。しかし、リールは、テンニェスの遺稿"*Die Tatsache des Wollens*"が提出される直前に死去している。

19 Ferdinand Tönnies: *Philosophische Terminologie in psychologisch-soziologischer Ansicht*: Kessinger Publishing, 2010.

20 飯田哲也 『テンニース研究：現代社会学の源流』 京都、ミネルヴァ書房、1991年、p. 32.

21 T.d.W. S.13.

1.2 遺稿における意志論の全体像

本節では、遺稿のなかでも、意志論と記憶との関係に焦点を絞り、その視点から遺稿の全体像を描き出すことを目指す。また遺稿の本体に主著で展開される意志論と記憶という視点を重ね合わせることで、テンニェスがこの公募から落選した事情の背景には、当時の意志(Wollen)をめぐる支配的思想と彼の思想との対立の構図があったことがかいま見えてくる。遺稿において、この対決の構図は、一貫して意志の解釈の相違として、すなわち本質意志(有機的意志)と選択意志(合理的意志)の対比として表現されている。

テンニェスの論敵であるジグヴァルト(Sigwart)[22]によれば、意志は、主観から客観へと因果的に一方向を目指す力と捉えられている――ジグヴァルトにとって、意志は、論理的な意味での実現の決意(T.d.W. §2, §7)であり、想像により設定された外的状態(T.d.W. §51)に投入される、目的実現的な意志(T.d.W. §51)である。そのような意志の理解の延長線上には、人間の文化的共同的形式の一切を、(合理的)意志の客観やそれに対する関心によって構成された「目的の概念」に従属するものとみなす思考方法が見えてくる(T.d.W. §51)[23]。それゆえテンニェスにとって、ジグヴァルトの思想は、合理的知の操作により駆動された意志論を説いた19世紀前後に共通する近代的意志論を代表するものとして捉えられている。それはジグヴァルトの方法論的専売特許にとどまらず、当時の心理学、論理学、哲学、倫理学といった人文系の学問領域を遍く支配する学問的態度であった。

かりにもそうした支配的な流れに異を唱えるテンニェスが、当時流布していた意志論――行為の原因性として解された意志論――の視座を取り込み社会現象を解する、いわば主流派に鞍替えしていたならば、ミュンヘン大学哲学科の顔ぶれや、彼らの業績の中に、テンニェスが列していたのかもしれないだろう。また、困苦を極めた生活に背中を押されたテンニェスの就職活動にも光が射したのかもしれない。しかし、現実がテンニェスの希望通りにならなかったのは、この出来事には思想的背景が控えていたと考えられるからである。テンニェスの意志論は、当時の意志論のパラダイム的理解として流布していた、行為の因果性としての意志[24]、ならびに決意としての意志[25]の理解を、意志の事実の一つの様相(選択意志)とみなし、従来の解釈枠を本質意志論のもとに包摂して統一的に捉えるものであった。この選択意志と本質意志とを統一的に見る意志論の全体像が、時代のパラダイムにそぐわなかったが故に、主著の体制論(ゲマインシャフトとゲゼルシャフト)を含むテンニェスの理論的全体像は、不当ともいえる数々の評価に甘んじることになる。

遺稿において示されている意志論は、それに先立つ主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の意志論の構想を引き継ぐものであり、認識論的視座を巻き込みながら、選択意志の構造を集中的に究明するものである。また、選択意志の構造の省察に伴い、ゲゼルシャフト的社会関係とは対照的な、本質意志論に基礎づけられたゲマインシャフト的共同体論も、遺稿の重要なモチーフをなしている。

テンニェスの意図は、意志を有機的本質的なタイプと、合理操作的なタイプとの二つに分けて

22 テンニェスが、意志論を本質意志と選択意志との二つの意志から構想したのに対し、Christoph von Sigwart(1830-1904)は、意志を選択意志としてのみ理解した。ジグヴァルトによれば、意志は、行為との一致により意識され、意志の可能的な対象として志向された、未来的表象の実現に関わると規定される(T.d.W. §1, S. 38).

23 テンニェスは、この発想を、マルクス主義的唯物史観に重ねている。die "Überbau"-Welt liegt ganz allgemein im Wesen des menschlichen Willens, ist Produkt des Ordnungswillens von Menschen, die sich nicht mehr im status naturalis befinden.(Fußnotiz 1, T.d.W. §50 , S. 102).

24 カント 『道徳形而上学原論』p. 85.

25 クロコウ 『決断』pp.127ff.

論じ、その意志の二つの相(有機的意志と合理的意志)の対比から、近代特有の、意志と思考との連関の問題を浮かび上がらせることにあった。この意志の二つの類型を意志に関する考察の基本的な構成に汲み上げてくる彼の発想に帰着することで、われわれは、体制論的にはゲマインシャフトからゲゼルシャフト、そして意志論としては、本質意志から選択意志への変容過程を再構成することができるだろう。

こうした遺稿におけるテンニェスの意志論は、哲学的に考察された、有機的意志から合理的意志への変容を、19世紀末の社会的変容に重ねあわせて描き出す試みともいえる。それはゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行として、伝統社会から近代、ないしポスト近代への移行を意志論として検討する材料を提供するものである。つまり遺稿で展開される社会分析には、テンニェスの他著「しきたり」論文などと呼応する形で、ゲゼルシャフトの一つの究極の形態である消費欲求の記号化をめぐる問題分析へと広がりを見せている。こうして圧倒的な経済力と軍事力とを背景とした欧米列強の植民地支配から、二つの大戦を経て、1960年代後半に日本を含む西欧近代文化圏に定着する大衆消費社会は、19世紀末のテンニェスにより示された、選択意志の究極の形態のひとつとして説明されうる思考行動様式とみなすことができる。それは極限的には、記号の操作により「物質的システムの配置を変容せしめ、また支配する」(T.d.W. §51)選択意志のあり方の延長線上に予見されうるものであった。この問題は、ちょうどボードリヤールが『消費社会の神話と構造』において、消費欲求が、生産システムの産物としてだけではなく、欲求の記号化とその操作による欲望の増幅のメカニズムを具えた、記号化とその操作のなかで考察されていたことに重なる[26]。この記号の操作と欲望との関係こそ、テンニェスにより「機械的形成物」と「概念」的抽象である選択意志(論)として述べられるものである。この欲望の記号化のプロセスは、遺稿の文脈では、自己の関心や欲望により恣意的に想像され(T.d.W. §49)、また選択された対象の快的側面を記号により純化し、当該対象の他のものとの相互関係を捨象するという形でなされる、概念的操作の問題に相当する(T.d.W. §51)[27]。この欲望の記号化という視座のほかに、「しきたり」論文には、その応用形態としてモードと欲望との関わりが明確に指摘されている[28]。

そのような消費社会的な心性は、暗い部分、見えない多様性、概念的把握からこぼれ落ちる実質のなかにある対象(T.d.W. §4)の「像を、他の像の陰影と比較することによって弱め」、「快において投影されたものと、嫌悪により投影されたものとに分け」る記号のシステムのなかで(T.d.W. §6)、快なるもののみを選択する「『取得と占有』の傾向や行為をもつ」(T.d.W. §13)「排他的」な仕方(T.d.W. §8)に特徴づけられている。そうした消費的心性は、同じ対象の多様な陰影を「他者と共に観察することを許さない」(T.d.W. §51)傾向をもつ。そして主体と対象との間には、「創造者—思惟の主体—との連関においてのみ実在性を有するにすぎない」[29]個別的な関係しか存在せず、そ

26 「記号の働きは、常に両義的である。その機能は、二重の意味で祓いのけることである。つまり記号(力、現実、幸福等々)を捕らえるために何かを浮かび上がらせることであり、他方、否定し、抑圧するために何かを呼びおこすことである。(…)イメージや事実や情報によって一般化された消費も、現実の記号によって現実を祓いのけ、変化の記号によって歴史を祓いのけることを目的としている」ボードリヤール 『消費社会の神話と構造』p. 24.

27 die Späre der Zeichen..., bedeutet die Behauptung des Daseins von Materie, und vollends der sensiblen Qualitäten nichts, als die wohlbegründete Mutmaβung, daβ der sie wahrnemende Organismus ein *normaler* sei, d.h. daβ jeder wahrnehmende Organismus die gleichen Sensationen habe, oder haben würde, der mit den gleichen Bedingungen ausgestattet sei, daβ also aus der stattfindenden Wahrnehmung auf viele andere, nach Maβgabe der Erfahrung, geschlossen werden dürfe. T.d.W. §51, S. 104.

28 Tönnies: *Die Sitte*, SS.86ff.

29 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p.165 (G.u.G. S.73).

れゆえ「他人の幸福は自己の幸福に従属せしめられ依存せしめられ」[30]る限りにおいて存在するものとなる。そうした選択意志の優位な社会における「主観的な現実は、人間や他の魂の数と同じだけ存在」(T.d.W. §8)する個別的な性質を宿す。すなわち「自分以外のすべての人々に対しては緊張状態にある」「それぞれ一人ぽっち」な人間の孤独なあり方は、遺稿と主著とに共通する、選択意志論の問題のなかに浮き彫りにされている[31]。

このゲゼルシャフト的な人間の孤独なあり様と、遺稿ならびに主著で描かれるゲマインシャフト的な人間の結合様式とは、極めて対照的な位置付けにある。ゲマインシャフト的共同生活は、主著では、「すべての信頼にみちた親密な水入らずの共同生活」[32]のなかで「自発的に苦楽を共にすること」で形成される。その生活の形式は、「人生の親しき伴侶に対する依存と感謝の念にみちた思い出」[33]、すなわち記憶に託される。遺稿では、この精神的ゲマインシャフトの基礎づけとしての記憶が、認識論的構成のなかで相互に結合する表象関係(思惟)の制約としてあると考えられている(T.d.W. §30)[34]。すなわち表象の相互関係は、先にあり、長きにわたり堆積する経験の総体(=記憶)のなかで形成され(T.d.W. §52)、そして現在における経験にあらわれるとされる。端緒となる「意志されていない活動とは、最初の事実」として「記憶されているものである」(T.d.W. §52)。ここで記憶は、先行する習慣や精神的、文化的、宗教的営みの、現在における繰り返しと、それが認識において摂取される際の接触面をなす。つまり記憶は、思惟に働きかけ、生へ新たな意味づけを与え、共同性を再構成してゆく役割を果たすものである(T.d.W. §30)[35]。そのように語られる「記憶」は、もはや情報の貯蔵庫や行為の実現の手段という姿とは全く異なる側面を見せている。

さて、遺稿のなかで記憶と本質意志との関係に表現される「人と人との関係〔の〕根源的契機」の最も明瞭な表現は、「直覚的な愛」(T.d.W. §18)である。それは思惟の目的合理性を削ぎ落とした形式である「習慣」としての「愛」とされる。そのような習慣としての愛は、「恒常不変なもの」としての「意志の存在の再生」であり、それにより「人の周りを取り囲む、固い絆」(T.d.W. §18)のことを指す。テンニェスは、こうした本質意志に即した人間の活動に、例えば、自然と人間の共同生活に寄り添う農夫の姿、有機的な目的のイデアを想像力により表現する本来的芸術や文芸、ならびに詩の役割(T.d.W. §46, §47)を挙ている。

以上のように、遺稿のなかで、記憶と本質意志との関係を辿ったとき、そこに選択意志の生成の契機も説明されることになる。選択意志は、表象の相互間に織り込まれた、快と不快との混合と調和(T.d.W. §15)に不満を覚える願望、ならびに決意と呼ばれる思惟が、表象相互の内部関係を比較考量し、自らの意欲を満たす未来的表象(目的)を選び取ることで駆動されることになる(T.d.W. §19)。こうした選択的行為の相の中で、記憶は、行為が成就するまで、行為の目的を導き、そして保持する役割を担う。しかし、本質意志との関係とは異なり、選択意志的行為に用立てられる記憶は、その行為の成就とともに消滅することになる(T.d.W. §53)[36]。なぜなら、選択意志的行為の

30 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 214 (G.u.G. S.99).
31 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 91 (G.u.G. S.34).
32 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 35 (G.u.G. S.3).
33 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 193f (G.u.G. S.89).
34 「表象相互(…)結合により、ないしは、直接的な生と力の感情の連続とその中に含まれている運動の衝動や欲望、ならびに活動の感情にともなう表象により、制約されている。」S.72.
35 「類としての人間が他の生きた存在と共有する、遺産の結合において制約されているのだ。」S.72.
36 「そのときだけの実現のためだけに、感覚が再生されるときには、記憶は、決意、すなわち意志が更新するための、単なるある種の刺戟を意味するにすぎない。」S.108.

実現の手段としてある記憶は、他との関連をもたず、その選択的記憶が、他者に委ねられることがないからである。つまり、選択意志は、本質意志が形成する経験の可能性の総体(＝記憶)のないところに起動することはないということを意味する(T.d.W. §52)[37]。以上のように、テンニェスの意志論の全体を記憶論を媒介にして再構成することは、選択意志が本質意志に支えられていることを明瞭に示す有効な解釈枠組みであり、また、そうした視座を集中的に与えてくれるテキストが遺稿"*Die Tatsache des Wollens*"(意志の事実)であると筆者は考える。

2. 本質意志論に関する二つの解釈枠

従来、本質意志は、二つの「意志」に分裂して――ときには生理学的身体に対応する自然的意志として、またときには歴史的に経験された家族的封建的体制の意志として理解されてきた[38]。すなわち、本質意志といえば、意識の背後に控える盲目な自然の意志がすべてを支配するフロイト流の抑圧された無意識[39]として、ないしは、家族制の解体までもが都市化と個人化により押し出された現代社会では遺物としてしか認知されることのない、旧体制の支配力と解されてきたのだ。はたして、そのような本質意志論の解釈は、テンニェスの意志論の全体構想を整合的に導き出したものなのだろうか。こうした問いに応えるためには、従来のテンニェス研究のなかで通説とされている本質意志論の解釈枠組みを示し、そうした枠組みがテンニェスの記憶論の理解にどのような影響をもたらしているのかを考察することが必要となるであろう。そのため、遺稿における意志論を再構成し、ついで意志論と記憶論との関係の再構成を証明することが、本章の課題となる。

主著によれば、本質意志は、意志の三重の生命形式の相により統一的な構成にあるものとして表現されている。それらの三つの形式は、①適意として生物に具わる新陳代謝の活動(血のゲマインシャフト)、②血縁と地縁の包摂する範囲において、家や土地といった共同生活の中心となる空間での生活の享受と反復とを通じて、生活の意味づけを再形成する習慣や儀礼(空間のゲマインシャフト)、③同時代のいまここに並存する人と人との間に交わされる有限な発話を超え、死者と生者とを結びつける記憶(精神のゲマインシャフト)である[40]。共同関係を意志論として捉えることは、他者とのつながりを意志において統一的にみる視座にもとづくものである。そのような統一性を保持する理念的なものは、家族や地縁封建的共同体などの具体的な、そして外から眺められた実体としての意志ではなく、個別性を超えた普遍的な世界そのものの生成に関わる了解の言語、すなわち縦横の世代に糸を張りめぐらしながら、他者との関係を含み込む、「記憶」による経験の能動的意味づけの営みのなかで形成されている。

さて、それでは、従来、本質意志はどのように語られてきたのだろうか。本章では、筆者の問題意識を明確にするため、新明正道の『ゲマインシャフト』のなかに示された本質意志論に関する二つの解釈枠組みを例に取り、従来、テンニェスの記憶論が意志論のなかで整合的に位置づけられていないことを示す。新明は、日本のテンニェス研究史のなかで、初期の段階において、まとまった論考を発表している人物であり、標準的な意志論解釈の準拠枠を示しているという意味で、大きな影響をもっている。

新明を代表とする従来の解釈枠では、本質意志

37 「意志の心的状態は、認識の心的状態を前提としており、認識の心的状態は、まず第一に、再生によって、活動的な表象へと変化する。その後はじめて、決意の活動が可能となる。」S.105.

38 新明 『ゲマインシャフト』p. 13.

39 フロイト「自我とエス」、『自我論集』pp.211ff.

40 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(下)』pp. 157f (G.u.G. S.187).

は、衝動や感情といった低次の欲求と同一視されている。

「思惟の介入度の少ない感情や衝動を中心とした精神的活動をもって本来の意志と見る考え方は、自然的な衝動や本能を意志そのものと同視することになる反面、思惟的要素による感情や衝動の支配力を実質的に意志として否定する」[41]

ここで新明は、テンニェスのゲマインシャフト的共同性が、なぜ本質意志論の構想により基礎づけられるのかという問題を、意志が自然的に生成するか、人工的に構築されるかの違いに見ている。新明によれば、本質意志は、衝動や感情といった人間の自然としての身体的対応物と同一視されるがゆえに本来的であり、生理的身体のはたらきに近いというただ一つの理由のために、意志は、そこに思惟の要素が入り込む隙がない自然の存在として理解される。新明の述べるとおり、たしかに、思惟が介入する余地のない、身体の生理的欲求そのものを本質意志とみなす解釈は、「思惟を含む意志」が(知性的)活動を導くという本質意志の定義に叶うものともいえるし、適意と習慣と記憶との三つの意志の生命形式により構成される本質意志論の一つの層――新陳代謝のシステムとしての適意[42]――を限定的に取り上げた解釈なのかもしれない。また自然の営みに即した、適意の形式が強調されれば、本質意志＝自然の意志という図式が成立し、その図式が選択意志の人工性を一層明瞭に浮き彫りにすることになる、と新明は考える。続く箇所において、新明の解釈は、行動主義的な方向へとふれてゆく。

「〔テンニェスが〕意志としての実在性を否定した思惟の介入度の多い選択意志もまたゆうに意志として実在性を要求することが出来るわけであって、目的への思惟によって決定された意志の如きは、特にこれによってかえってその意志の強さを保証されている」[43]

このような解釈のなかでは、意志は語り得ないものに封印され、関数化された生理的刺戟と反応との繰り返しに生の営みを還元する、行動主義的思考[44]に引き寄せられて理解される可能性がないだろうか。新明は、テンニェスの本質意志論には、人間と生物とに共通の、必然的に繰り返される新陳代謝の機能は認められはするものの、そこに人間特有の本性に関わる問題が見過ごされていると考える。それは意志を予測可能なわかりやすい意志――生命は生殖をめぐり互いに競争する盲目な意志――へと貶める理解と裏表の関係にある。こうした解釈枠のなかには、自己と他者との間にある共通の、そしてまたときには互いの行き違いにより引き起こされる共にあることの困難をも乗り越えようとしてきた精神的文化的活動を、統一的な視座において描き出す可能性は解釈対象とされることはないのだ。そこにあるのは、生存競争と、そして残る可能性としては、人間は生存競争をするものだという、予め機械的に理解された観念論的思考である[45]。上述の引用箇所におい

41　新明 『ゲマインシャフト』p. 52.

42　『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 164 (G.u.G. S.73).

43　新明 『ゲマインシャフト』 p. 52.

44　「意識は魂とまったく同じく、観察できない」 ワトソン「行動主義者の心理学」p. 516.

45　他との関係を切り離された状態においても、個人は合理的な意志に促されて行為するという新明のこの解釈は、原初状態のなかで合理的な意志をもつ「原子論的個人」の存在を意志論の前提とする石瀬論文へ引き継がれる。「相互作用の連関によって成立すると言われる社会はその相互作用の止む時には、社会としての実在性を喪失し、相互作用の生ずる時に、再びその実在性を恢復するということ、つまり、社会は相互作用の有無により存在したり、又存在しなくなったりするようなものとならざるを得ないのである。だから、相互作用の中絶によって人間が社会の外に出たり、あるいは又社会そのものが実在しなくなったりするのであり、その限り社会性を有しない人間が現実に存在し、人間は社会性を持たなくても、現実に人間たり得ることにもなる。従って、個人は、時間的には兎も角、論理的には社会の先にあるものとなり、社会は個人の後にあるものとなる。このように、相互作用説にとっては原子論的個人主義は避けることのできない帰結となり、人間存在の根源的社会性の確立は不可能となる。」 石瀬秀治 「テンニースの社会本質論」p. 200.

て、新明は、適意としての意志の相においても、人間の意志には、選択的合理性の要素が認められると考え、その点において他の生物の意志との違いを際だたせようと考える。こうした適意の形式に偏向した本質意志の解釈には、適意、習慣、記憶の三つの意志の生命形式の重層性に構成される意志の全体構想から、「記憶としての意志」が抜き取られていることが認められる。

「記憶としての意志」が、本質意志論の構想から抜き取られて解釈されていることは、ゲマインシャフトを過去の歴史的遺物、すなわち家父長制や封建制の権力とみなす、ゲマインシャフトへの文化史的評価と密接な関わりをもつ。

「ゲマインシャフトとゲゼルシャフトとの対概念は(…)一面において現実社会の反映としての意味をもっていたものの、それでもなお多くの不明瞭さを含んでいた(…)テンニェスは最後にこの記号に辿り着いたが、これを採用するにいたって、自己の体系のなかに漠然たる不明瞭さを生ずる道を開いたものであった。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトも言葉として若干歴史的な社会の色調を帯びていないわけではないが、これに顕示されたかぎりの歴史的認識は啓蒙時代譲りの自然社会と文明社会との範疇以上の特異性を示すものではない。」[46]

このように現在の生と関わりを持たない歴史的事実を、本質意志の本体とみなす新明の解釈は、テンニェスのゲマインシャフト論が曖昧な歴史観にもとづいて生まれてきた、という結論へと至っている。ここには、記憶を通した経験の再構成という解釈学的な作用、すなわち「記憶としての意志」が抜き取られている。しかし、テンニェスの歴史観の成立が、それぞれの時代における個別的な経験を含む文化現象の因果的連関を意志論として統一的にみる文化哲学の方法に基づいていることに立ち返るならば、新明の発想は、経験の可能性を記憶において再現し、また解釈することで能動的に意味づけるテンニェスの本来の意図から遠いところにあると考えられる。テンニェスの歴史観は、「魂の観念的な統一・調和として」「形態的・象徴的に表現された(…)慣習〔習慣〕」の繰り返しを、過去のものとしてではなく、現在のものとして「思い出〔し〕再生」する、意味づけの営みに基礎づけられている[47]。このような角度から新明のテンニェスのゲマインシャフト論への評価をみると、そこには過去に対する現在の生の関与を欠如した、過去の遺物としてのゲマインシャフト像をも作り出す本質意志論の理解が浮かび上がってくる。しかし、こうした本質意志論の解釈枠は、もう一つの解釈枠である、行動主義的に解された「本質意志」と裏表の関係にあるものである。

46　新明　『ゲマインシャフト』p. 13.

47　テンニェスによれば、記憶は、祭祀や儀礼などの習慣を通じて、個と共同との統一と調和とを思い出し、再生する意味づけや共に語る共同的営みとされている。以下の引用箇所で、記憶は、何かの目的を実現するための道具としてあるのではなく、思い出されるたびに、新たに意味づけられる人間関係の根源的統一であると述べられていることは重要である。「一体性や慣習はいずれも、積極的に平和を促進する力をも有している。両者は、自然的なあるいは習慣によって基礎づけられた個々の関係を肯定し、友好的行為や援助を義務化し、魂の根源的または観念的なる統一と調和とをもたらす―この場合、魂の根源的な統一・調和として直接的に表現されたものが家族精神であり、魂の観念的な統一・調和としてはむしろ形態的・象徴的に表現されたものが慣習である。したがって、魂の統一・調和は、一体性や慣習によって思い出され再生されるのである。祝祭や祭祀の意味と価値とは、それによって喜びや悲しみに対する共同の参与と、聖なるもの・神的なるものへの共同の帰依献身が、調和のとれた整った形で表現されているという点に存するのである。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(下)』p. 161（G.u.G. S.189).

また、テンニェスが説いた記憶論は、ギデンズの伝統社会論に連続していると筆者は考える。ギデンズは、個人の経験の連続性を与える基盤を、記憶がもたらす能動的な共同の出来事(＝伝統的習慣)とみなす。すなわち、ギデンズの考える伝統とは、硬直した過去の出来事ではなく、伝統に触れるたびに更新される意味づけの作用(＝解釈)と考えられている。「記憶とは、能動的な社会過程であり、その過程をたんに覚えたことがらの想起と同一視することはできない。われわれは、過去の出来事なり状態についての記憶を絶えず再生産しており、したがって、こうした繰り返しは経験に連続性を与えていく。(…)伝統とは、《集合的記憶を組成する媒体》であると言うこともできよう。一個人にのみ帰属する言語が存在しないように、一個人にのみ帰属する伝統も存在しない。伝統の「完全無欠性」は、たんに時間を超えて持続しているという事実に由来するのではなく、現在を過去に縛り付けていく一連の要素を確認するためにおこなう、解釈という絶え間ない「作業」に由来しているのである。」アンソニー・ギデンズ　「ポスト伝統社会に生きること」pp. 120f.

行動主義的に解された本質意志は、心に接面をもつ意志のあらわれの一切を刺激と反応の閉鎖系に還元することで、心と意志との関わりがいかなるものであるのか、という問いと意味づけへの試みを隠蔽するものである。そうした意志の理解は、古代中世史に現れる歴史的共同体の意志を本質意志、ならびにゲゼルシャフトの具体像とみなす文化史的方法と重なるものである。その像とは、「中世的色彩をもつ」「抽象的」な支配形態のことである[48]。こうした評価のなかには、それに向き合うためには繊細な姿勢が求められるはずの、他者と自己との同一性の問題からゲマインシャフトの歴史的構成を辿ろうとするテンニェスの方法に対する、いわば、あてがいぶちに上から結論を押しつける粗暴さが共通して見られはしないだろうか。こうした従来の解釈傾向は、哲学は、一つの考え方のもとで、世界観を表すべきであり、その語りのなかでは、すべては関連をもち、矛盾無き統一性のなかで語られるべきである[49]、というテンニェスの思想の根本的態度に沿ったものではない。従来の解釈には、記憶論に託されたテンニェスの共同体論の意図――死んだ過去を、生をとりまく現在の諸連関のなかに甦らせる記憶のはたらきが、人と人との相互関係の要をなしているという彼の共同体論の中心構想が十分に評価されていないのだ。ここに筆者は、テンニェスのゲマインシャフト論を、記憶としての意志に支えられた共同性として再構成する必然性があると考える。

3. 遺稿における記憶論：了解の構造と本質意志

「2. 本質意志論に関する二つの解釈枠」で、従来の本質意志論解釈は、意志を人間の背後にある自然の盲目的な意志と見なすことで、意志を個別的なものと捉える傾向にあることが示された。そのような解釈には、過去と現在との間を往復する語りと想起とにより、人間の結合関係を語り直し、新たな意味づけを与え直すゲマインシャフトの基礎的作用が脱落していることが指摘された。それでは、本質意志と記憶論との関係を見直すことにより、従来の解釈枠が残した問題はどのように解消されるだろうか。

遺稿『意志の事実』における「記憶」は、二種の記憶により構成されている。また、二つの記憶(論)は、それぞれ有機的意志(本質意志)と合理的意志(選択意志)により基礎づけられている。ここでは、本質意志と記憶論との関連について述べ、選択意志と記憶論との関連については、「4. 選択意志と記憶」で言及したい。

テンニェスによれば、本質意志は、記憶の相互連関のもとに成立しているという。また、本質意志は、状態としての意志とも感情の意志とも呼ばれる(T.d.W. §30)[50]。テンニェスによれば、状態や感情は、一つの意志の出来事が、様々な意志の連続のなかにあり、別の意志の出来事との相即不離な関係のなかで構成されるものと考えられている。また意志は、表象、ないしは表象の連関の経験のなかで認知される。それゆえ、ひとつの意志の出来事が別の意志の出来事と相互に連関することは、表象相互の連関としてあらわれるとされる(T.d.W. §14)。そうした表象としての世界のなかでの表象相互の連関としてあらわれる意志の全体は、心象世界の記憶を担保にすることで、切れ目無く広がる心的世界を構成する(T.d.W. §6)。この切れ目無く広がる心的世界の構成は、いまここへと、せり出しつつ、しかしとどまることを知ら

48 「来るべきゲマインシャフトがいかなる社会であるかについては、それを特徴づける何らの試みもなされておらず、テンニエスによって画かれているゲマインシャフトの像は、過去的・中世的な色彩を強くもつものであるか、あるいは抽象的・超歴史的な色彩を多分にもったものであった。この意味において、テンニエスは浪漫主義者と呼ばれても止むをえないであろう。」杉之原寿一 『テンニエス』 人と業績シリーズ 9 、東京、有斐閣、1959年、p. 52.

49 Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Theorem der Kultur-philosophie: Soziologische Studium und Kritiken.* Erste Sammlung, 1925, S.4.

50 「有機的意志は、全体としての感情の生の自然な表れである。」S.72.

ず過去に流れ去る状態の継起(Abfolge)のなかで、失われたものの再構成を可能にする記憶に保証されているという(T.d.W.§52)。この状態の契機については、主著では次のように表現されている。

「観念を自分の観念と定める前に観念を区別したりその価値を認識したりするために、想い出とか特殊な思いつきや考えを必要とするような、いわばそのために尺度や秤を必要とするような観念があるということである」[51]

こうした継起の連鎖は、「時間的にみて、先に現前していた状態のなかに、行為が含まれる」ということであり、「先に表象され、考えられたものとして」(T.d.W. §52)一つ一つの出来事が、過去のものとして、心のうちに保持されることになり、従って出来事の制約としての心的状態を構成する。このように見れば、遺稿において、心的活動の形成条件とみなされる心的状態としての本質意志論は、主著における本質意志論の基礎定義を継承するものであり、主著での「本質意志は過去的なるものにもとづいており、生成しつつあるものと同様に、この過去的なものから説明されなければならない」[52]という叙述は、遺稿の「先に表象され、考えられた」「経験」の想起という形で補足されていることがわかる。

主著における記憶論は、それが本質意志を支えるものであるときには、常に了解(Verständnis)を経由し、また了解の構造のなかで語られている。了解とは、「相互に共通な結合的な心もち」であり、理解されたことの共有に支えられた「共感」である。そのような共通の理解とは、本質意志の内容としての「過ぎ去った」「過去的なる」記憶を媒介にした他者との共有の営みを意味する。精確には、テンニェスは、「了解」を、言語の形成を受け、発展を遂げる動きの中において捉えている。しかし、同時に、そうした言語の運動は、情報の伝達手段としてでもなく、自分の思いを一方的に相手に押しつける、伝達内容としての言語でもなく、また「申し合わせによってそのようなものと定められた」己に関わりのない外から与えられた言語でもないという。そうではなく、了解の成立発展は、「共に喜び共に悲しむ傾向とによって規定され」[53]た、他者の「私」への関与と、「私」の他者への関与と、そうした直接的関与を取り巻き、それを支え活かす人間の共同的文化的営み――遺稿においては、これは直覚的な「愛」と呼ばれる――の全体のなかに顕現する暗黙の言語[54]に基づいている。

「有機的意志は、全体としての感情の生の自然な表れである。(…)しかし、思惟は、極めて多様な「記憶」において制約されていて、そしてその記憶は、感情の生のなかに根ざしている。すなわち、表象相互の、また感覚に付随する表象によって、ないしは感覚相互の結合により、ないしは、直接的な生と力の感情の連続とその中に含まれている運動の衝動や欲望、ならびに活動の感情にともなう表象において制約されている。さらには、類としての人間が他の生きた存在と共有する、遺産の結合において制約されているのだ。」(T.d.W. §30)

テンニェスによれば、了解概念は、一つ一つの言語的活動を可能にする言語性とも言い換えられうる、「部分との連関において全体として運動し、全体として働きかける」[55]有機体の姿である。そ

51 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 184 (G.u.G. S. 84).
52 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 165 (G.u.G. S.73).
53 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 59f (G.u.G. S.17).
54 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 62f (G.u.G. S.19).
55 In Wahrheit aber gibt es, wenn auch als Anomalie für die mechanische Ansicht, ausser diesen zusammensetzbaren und sich zusammensetzenden Partikeln eines als tot begriffenen Stoffes, Körper, welche durch ihr gesammtes Dasein als natürliche Ganze erscheinen und welche als Ganze Bewegung und Wirkungen haben in Bezug auf ihre Theile: die organischen Körper.『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p.39 (G.u.G. S.5).

うした言語性に裏づけられた了解の存在とは、一者のあらわれを可能にする、全体の存在の支えを前提とし、その限りで全体の存在を活きたものとして理解し、また語りかける一者の存在により、全体は支えられもするような相互関係そのものである。それゆえ、了解は、他者の承認を必要とし、他者の存在に介在されることで人間の共同的文化的営みの深層に根を張った「人間を一つの全体の部分として結合する特殊な社会的力であり、社会的共感」[56]のことにほかならない。

4. 選択意志と記憶

本章では、主著における意志論、ならびに従来の意志論解釈を導きとしながら、遺稿における選択意志論を、記憶論の視角から再構成することを目指す。また、記憶論の視角から再構成された選択意志論により、従来の解釈枠の中に見出されることのなかった、本質意志と記憶(的言語)との関係、すなわち記憶に支えられた精神的ゲマインシャフトの構想が整合的に示されることになる。

「3. 遺稿における記憶論」で述べた遺稿における、本質意志と記憶との関係は次のように概略することができる。主体と表象との認知関係は、時間の継起に従い、過去の相において表象相互の状態を構成し、過去の経験として説明されるものであった。遺稿においては以下の箇所に集約される。

「時間的には、先に現前していた状態のなかに、行為は何らかの仕方で含まれる。すなわち、先に表象され、考えられたものとしてである。しかし、先に表象され、考えられるためには、行為は、その要素に応じて、先に経験されてなければならない。(…)意志されるためには、心的活動は、先に経験されていなければならない。」(T.d.W. §52)

すなわち、「最初の因果性の制約としてあるのは、時間を超えた意志の存在」(T.d.W. §53)であり、それゆえ状態を構成する表象相互の結合の背景となる全体の輪郭は、その意志の形成物である表象の相互関係を現在の相において再現する記憶により辿られることになる。この記憶による過去への辿られ方が、「父祖の意志として」また「神の意志として」「一つの家族とみなされ、共同の祭祀と祭壇によって血を同じくするという記憶を保持している一民族全体の根源的統一性」[57]とされる本質意志に支えられた実在性を意味する――その様々な形態がゲマインシャフトである。

それでは、選択意志は、記憶との関係のなかで、どのようなプロセスを経て生成してくるのだろう。選択意志に関する叙述は、遺稿も主著も基本的には同じ思想に貫かれている。その思想とは、選択意志は、本質意志とは異なり、表象世界そのものの生成には関わらないということであり、すでにできあがった外の世界の表象を操作する思惟の欲望と言い換えることができる。そのメカニズムを概観するならば、次のようになる。すなわち、思惟の選択的傾向に駆動された願望(欲望、決意)は、状態としての意志に繋ぎ止められた表象の相互連関から、一つの目的表象を選び取り、その表象の実現に向けて行為を発動することで、意志の因果的過程の全体を支配する。その選択された表象への支配は、一時的に心のうちに留められることで可能となる。この一時的な表象の留保は、記憶のはたらきにもとづき可能とされるという(T.d.W. §52)。選択意志が発動される全体の行動のプロセスのなかで、記憶は、行為の実現と共に消え去る儚きもの――他者に委ねることも、委ねられることもない個別的なもの――と考えることができる。遺稿では、他者に委ねられる

56 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 59f (G.u.G. S.17).
57 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(下)』p.184(G.u.G. S.201).

ことで存続する記憶について、自己自身は恒常的に存続する記憶のなかでしか想起できないものと語られている――「自己想起の不確かさは、自分自身で想起する(あるいは記憶において恒常的に存続する)意志を頼ることはできない。」(T.d.W. §53)。すなわち、記憶とは、個別的に立ち現れるものではなく、本来、共同の関係のなかにあるものであり、「二人あるいはそれ以上の人間のあいだの相互的肯定のあらゆる関係」にして、「それらの関係が彼等自身の表象のうちにあり、また彼等の意志によって定立せられており、その結果個々人の意志に対して限定的に作用する」ものである[58]。

ここで、記憶論の視角から、二つの意志を比較するならば、本質意志は、過ぎ去るという意志(時間)の性質のもとで、主観と主観との間を取り結ぶ内的結合により形成されていることになる。逆に選択意志は、すでに形成されている表象の内部関係から、欲望を充足させる(未来的)表象を取り出し、操作することにたずさわる。主観と客観との相関関係により形成されている表象の相互連関から、一つの未来的表象が「前」に「投影」されることで(T.d.W. §53)、連関のなかに落ち着きどころを得ていた表象が取り出され、恣意的な想像力=記憶により操作されることになる。そのことは、表象を前に立て、表象の連関のなかから一つの目的表象を「前に引き出」してくるプロセスとして説明されている(T.d.W. §54)[59]。この選択意志の一連のプロセスは、恣意的な想像を司る思惟の働きとして、主著では、「己の行う可能的な活動の(蓋然的または確実な)諸結果を想像して、基準として定立されている最後的成果の観念に照らしてそれらを比較測定し、その可能的な諸活動を選りわけて配列按排して、将来それらを実現せしめる」[60]思惟とされ、遺稿では、客観の「システムの配置を変容せしめ、また支配する」(S. 104, T.d.W. §51)思惟として、基本的に同じプログラムのもとに説明されている。しかし、こうした選択意志のプロセスは、「意志の事実」のうちの一つの層を占めるにすぎない。「意志の事実」とは、先行する文化的営みが記憶の流れの中に潜在しており、その記憶が認識を通して分け与えられ、はじめて意志が個別的なものとして起動し、またその行為が他者との相互関係のなかで記憶として継受されるということであった(T.d.W. §53)。選択意志の発現は、この「意志の事実」の全体の流れのなかの一つのプロセスを占めるにすぎないのである。

なお、遺稿では、恣意的な想像力に駆動された目的合理的な意志が、他のものとの関わり合いのなかに置かれている豊かな襞をもつ表象を、関心の実現のために全体から切り取り、「私は意志する」という決意の言語に吸収する側面が強調されている(T.d.W. §2)。それは、対象の陰影の隠れた部分を、排除し、自己の欲望の実現にとって都合のよい側面しか投影しない選択意志の性格に帰結する、言語論分析と位置付けることができるだろう(T.d.W. §4)。

さて、選択意志の一連のプログラムの発動する端緒に着目すれば、本質意志と選択意志との整合的な位置付けが明らかなものとなる。「最初の因果性の制約としてあるのは、時間を超えた意志の存在」(T.d.W. §53)であり、先に経験され、選択を可能にせしめる、表象の相互関係の織りなす世界の存在が前提としてある。というのも、選択意志が表象の操作に関わるという点からみれば、選

58 Tönnies: *Soziologie im System der Wissenschaften:Soziologische Studium und Kritiken.* Zweite Sammlung, 1926, S. 241.

59 「われわれはまた、「恣意的」に感覚を再生することができると考えている。容易に反論できる思い違いに、これまた多くの心理学者がとらわれている。その錯覚の中身はといえば、選択的行為は、表象の検討を前提としており、そしてその表象に選択的行為は関連しているので、選択的行為は表象によって前に引き出されてくるという考え方である。すなわち、選択的行為の力が表象に対して、その力を集中させ、それにより表象を要求し、強め、際だたせるという考え方である。」S. 110.

60 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 166f(G.u.G. S. 74).

択意志の形成条件は、選択される表象がすでに準備されていなければならい(T.d.W. §30, 52)からである。従って、ここから選択意志が本質意志の形成条件(制約)とはならないということがいえる。選択意志の(未来的)対象は、その「思惟の主体(…)との連関においてのみ実在性を有するにすぎない」[61]のであり、本来、一と他との相関関係、すなわち自己を取りまく他者との接点のなかに存在する表象の相互関係から、一つの表象を選び取ることで自己と他者とを切断する傾向を有する。このことは、主著第一版では、「〔ゲマインシャフト〕においては連関が先行し、敵対や給付についての〔ゲゼルシャフトの〕諸関係はそのあとから生じる」[62]というゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの変容に対応する部分である。それゆえ、(未来的)表象が媒介する他者との関わりは必要とはならない――否、むしろ、選択意志を行使する主体にとって、その目的対象が本来、他者との相互関係を取り結んでいることは、恣意的な行為の実現に対する障害となる。

以上のように選択意志の構成を記憶との関連から見たとき、従来解されてきた本質意志と選択意志との位置付けは、再解釈されるべき余地があると筆者は考える。従来、本質意志が選択意志を根拠づけるメカニズムは、基本的には、生物個体の適意の形式のなかで限定的に説明されてきた。新明によれば、有機体の器官が自ら生成するように、本質意志は自然の要求に即した――人為の介入の及ばない――自然の意志と見なされ、それとは対照的に、選択意志は、道具のように人間の思惟により形成されるものと解される。さしあたり、自然の意志は、人工の意志によって形成されることはないとされ、それが、選択意志の制約としての本質意志の位置付けの説明とされてきた。しかし、意志を生理学的な個体のなかにおいて見る従来の解釈は、時間的継起という意志の傾向への考察を欠いている。それゆえ、生物としての営みと同時に、時を超え、文化宗教的慣習(記憶)を介在する共同の営みに従う人間の「個人的な生命を超えて存続する」[63]精神的意志に対する基礎づけの問題は解消されることはない。従って、自然か、人工か、という判断基準にもとづき、本質意志と選択意志とを関係づける従来の解釈枠のなかに、重層的に表現されるテンニェスの意志論の整合的な基礎づけは見出されないということになる。殊にテンニェス研究に限定するならば、従来、本質意志と選択意志との位置づけの問題は、記憶論という視角から再構成されることはなかった[64]。それどころか、従来の解釈枠のなかでは、テンニェスの「記憶」は、行為の実現の手段と解され、一面的に理解されてきたのであり[65]、この点にテンニェスの意志論研究の取り組むべき課題が示されていると筆者は考える。

61 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p.165(G.u.G. S.73).

62 Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Theorem der Kultur-philosophie, Soziologische Studium und Kritiken*. Erste Sammlung, S.21.

63 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 181(G.u.G. S.82).

64 飯田のテンニェス解釈では、「記憶」は「願望としての意志」とみなされ、行為を引き起こす意志の能動的な発動過程のなかに置かれている。本来、想起は、意志の自発性によるが、しかし現にある存在の秩序を改変することなく、あるがままの世界を精神に宿し、その再現を通じて世界を感じ、近づこうとする営みである。従って、「記憶」を能動的な行為の駆動過程に限定する解釈は、「記憶」の性質を一面的に解釈する傾向を有する。飯田 『テンニース研究』p. 84.

なお、記憶現象(Gedächtniserscheinung)と行為との関係については、以下を参照。Hans Lorenz Stoltenberg: *Soziopsychologie*. in: *Ferdinand Tönnies Gesamtausgabe*, hg. v. Lars Clausen 10 Bde., Berlin, New Yoirk: de Gruyter, 2008, S. 529.

65 「記憶という意志形態によってテンニエスのいいたかったことは、人間が様々な状況に直面したとき、いかに行動すべきかをその都度一から考えるのではなく、記憶のなかに蓄えられている知識を基準にして、適切かつ敏速に判断するということであり、それこそが人間に特有の態度だということであろう。」吉田浩 『フェルディナンド・テンニエス:ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 東京、東信堂、2003年、p. 76.

結　論

以上、テンニェスにおける本質意志と選択意志との二つの意志から構成される意志論は、記憶による過去の出来事の再構成の可能性を問題とする記憶論の枠組みの中で構想されていることが示された。本稿では、主著を参照しながら、遺稿における「記憶」の位置付けをめぐり、本質意志と選択意志とを比較した。主著と遺稿との間には、一〇年以上（主著第一版から18年、主著第二版から12年）の隔たりがある。そして遺稿には、例えば、概念的思考行動様式の社会的浸透（消費社会化）を促す、意志の記号化の問題などの応用テーマが盛り込まれているものの、主著と遺稿とでは、意志論の構想に基本的な変化はみられない。ただし、遺稿は、テンニェスの社会哲学の経験的領域を取り払い、純粋に意志の基礎構造から練り上げられた論考である。

たしかに遺稿は主著より後に書かれたものである。しかし、だからといって、遺稿は主著の派生的なテキストであり、また主著の後追いにすぎないと軽視することはできない。むしろ、遺稿における、意志と記憶との関係が、主著の共同体論を意志論の視角から読み解くための有力な手がかりを与えるものとみることで、組織論や社会形態論の入り混じる主著の構想の全体は、意志論というフレームのうえに築き上げられたものであると考えることができる。そうした視角は、「人々の意志は、相互にさまざまな関係を結んでいる」[66]という主著の冒頭に置かれた意志に関する言及が、テンニェスの思想的展開の全体にまで行き渡っていることを示すものである。

本稿では、記憶論の枠組みを、二つの視点から概括した。それらは、表象としての記憶と、意志としての記憶という二つの方向からであった。表象としての記憶という視点は、認識における心的状態のなかで示される。それは意志が常時過ぎ去るという時間性のもとに成立する。すなわち、継起としての意志であり、継起の中で出来事は絶えず連続する過去の経験の網の目を構成し、その網の目は想起され語られる対象としてあるということである[67]。継起の連鎖は、先行する表象との相互関係を形成することから、主体の経験そのものは常に他との相互関係のなかに置かれているということである。表象としての記憶は、記憶の対象が、すでに経験された表象相互の網の中におかれている、ということを指す。その網の目こそ、宗教的文化的な慣習や儀礼といった人々が意識するしないに関わらず、思い出すということに重ねて、自己と他の存在との間を結びつけ、また、すでに潜在的に過去において結びついていることを確認する、意志としての記憶である。そのような本質意志に根ざした記憶は、個別的に選択されるものではない（T.d.W. §53）。すなわち、記憶の成立には、他の存在との相互関係が必要であるということである。また想起する自己自身が、他者に委ねられ、自分自身も他の関係のなかの記憶の一つとして、語りのなかに巻き込まれていくことにより、人間の精神的生命の原理としての記憶、すなわち記憶の共同性の可能性が開けてゆく。以上の枠組みからみれば、過去の経験を取り出す際の仕方、すなわち知性、ないしは記憶（知性）を介在し、知性の行為へ志向性に応じた意志のあり方から、本質意志ないしは選択意志という意志の類型が導き出されることになる。

テンニェスの意志論は、一であることと多であることとが、安定した有機的実在性のなかで調和するように構想されたものであった。それは人と人との関係が、過去の長きにわたる宗教的文化的営みの中で、記憶として蓄積形成され、また記

66　『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』p. 34（G.u.G. S.3）.

67　テンニェスは、主著第一版でも、「経験のなかに保持された出来事はすべて過去に属して」いるとして、主著第二版や遺稿と同じ見地から、経験対象へ向き合う際の基本的な発想を維持している。

憶として開かれ、記憶により支えられていること――人々がそれぞれの仕方で一つの記憶につながれ、共通の問題関心や想いに心を寄せる共生のあり方への認識にもとづくものである。そうした記憶のあり方への関心が現代において希薄になっていることと、社会経済的な場面で自己利益を優先するエゴイズムが、人と人との関係や人と自然との関係に困難な問題を突きつけていることとは無関係の出来事ではないと思われる。それらが裏表の関係にあることは、本質意志と選択意志とをめぐる「記憶」から見通しを与えられる問題ではないだろうか。

文献表

Ferdinand Tönnies: *Die Tatsache des Wollens*. Hrsg. Jürgen Zander: Berlin: Duncker u. Humblot, 1982.

Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979.

Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Theorem der Kultur-philosophie, Soziologische Studium und Kritiken*. Erste Sammlung, Jena: Verlag Gustav Fischer, 1925.

Ferdinand Tönnies: *Soziologie im System der Wissenschaften:Soziologische Studium und Kritiken*. Zweite Sammlung, Jena: Verlag Gustav Fischer, 1926.

Ferdinand Tönnies: *Die Sitte*. Frankfurt am Main: Rütten & Loening, 1905(Die Gesellschaft: Sammlung sozialpsychologisher Monographien; Bd. 25).

Ferdinand Tönnies: *Philosophische Terminologie in psychologisch-soziologischer Ansicht*: Kessinger Publishing, 2010.

Hannah Arendt: *The Life of the Mind*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981.

Hannah Arendt: *The Human Condition*. New York: the University of Chicago Press, 1998.

Immanuel Kant: *Kritik der Urteilskraft*. Meiner Felix Verlag Gmbh; Neuauflage, 2009.

Immanuel Kant: *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*. Hamburg: Felix Meiner, 1999.

Alfred Vierkandt: *Gesellschaftslehre*. New York: Arno Press, 1975.

Hans Lorenz Stoltenberg: *Soziopsychologie*. in: *Ferdinand Tönnies Gesamtausgabe*, hg. v. Lars Clausen 10 Bde., Berlin, New York: de Gruyter, 2008.

テンニエス 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：純粋社会学の基本概念(上・下)』 杉之原寿一訳、東京、岩波書店、1979年。

西村克彦 「テンニエス著『しきたり』(Die Sitte)」青山法学論集24(3)、青山学院大学、1982年、p. 57-90。

西村克彦 「テンニエス著『しきたり』(Die Sitte) (2)」青山法学論集24(4)、青山学院大学、1983年、p. 97-127。

磯辺俊彦、井上毅 「テンニース：所有について(1)」『農村研究』87号、東京農業大学農業経済学会、1998年、p.116-122。

磯辺俊彦、井上毅 「テンニース：所有について(2)」『農村研究』88号、東京農業大学農業経済学会、1999年、p.116-121。

大淵英雄 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフトとにおける「諸関連」と「諸関係」とについて：F.テンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(文化哲学の定理)』を中心に」『法学研究』(市川統洋助教授追悼論文集) 53-9、慶応義塾大学法学研究会、1980年、p. 179-196。

石瀬秀治 「テンニースの社会本質論」『富大経済論集』4-2、富山大学経済学部、1959年、p. 189-205。

鈴木幸寿 「いま、なぜテンニエスか」『社会学論叢』〔日本大学〕社会学科創設70周年記念号、日本大学社会学会、1991年、p. 24-40。

新明正道 『ゲマインシャフト』東京、恒星社厚生閣、1970年。

飯田哲也 『テンニース研究：現代社会学の源流』京都、ミネルヴァ書房、1991年。

吉田浩 『フェルディナンド・テンニエス：ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 東京、東信堂、2003年。

杉之原寿一 『テンニエス』 東京、有斐閣＜人と業績シリーズ9＞、1959年。

デュルケーム 『自殺論』 宮島喬訳、東京、中央公論社＜中公文庫＞、1985年。

マックス・ヴェーバー 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』 富永祐治、立野保男訳、折原浩補訳、東京、岩波書店＜岩波文庫＞、1998年。

ハンナ・アレント 『精神の生活(下)』 佐藤和夫訳、東京、岩波書店、2003年。

ハンナ・アレント 『人間の条件』 志水速雄、東京、筑摩書房＜ちくま学芸文庫＞、2000年。

カント 『実践理性批判』 波多野精一、宮本和吉、篠田英雄訳、東京、岩波書店＜岩波文庫＞、1998年。

カント 『道徳形而上学原論』 篠田英雄訳、東京、岩波書店＜岩波文庫＞、1998年。

ジークムント・フロイト 『自我論集』 中山元訳、竹田青嗣編、東京、筑摩書房、1996年。

ヘーゲル『精神現象学』長谷川宏訳、東京、作品社、1998年。

ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュ 『再帰的近代化：近現代における政治、伝統、美的原理』 松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳、東京、而立書房、1997年。

クリスティアン・グラーフ・フォン・クロコウ 『決断：ユンガー、シュミット、ハイデガー』 高田珠樹訳、東京、柏書房＜パルマケイア叢書11＞、1999年。

ボードリヤール 『消費社会の神話と構造』 今村仁司、塚原史訳、東京、紀ノ国屋書店、1995年。

ワトソン 「行動主義者の心理学」『原典による心理学入門』 南博編著、東京、講談社＜講談社学術文庫1059＞、1993年。